

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木優子

52

優子はバスルームに入ると、服を脱ぎ、急いで携帯を開いて、和樹からのメールに返事をした。

「和樹さん、ごめんね、私、今からお風呂に入ってくるね。」

すぐに返事が来た。

「いいなあ、僕も一緒に入りたいよ♡」

「いいよ。温泉とか一緒に入りたいね♡」

「ああ、いいねえ。でも、そんなと一緒に入ったら、僕、優子のこと襲っちゃうぞ。」

「いっよ♡」

「ああ、もう優子つてば、そんな殺生な・・・(笑)。わかった。僕も今から風呂に入ってくるから一緒に入ろう。僕が優子のことを洗ってあげるよ。手にいっぱい泡をつけて、優しくね。」

浴室の中で優子はずっと和樹のことを考えていた。

あの、ゴツゴツしているけれど、優しい指が自分の身体の隅々まで洗ってくれていることを想像しながら、自らを愛撫していった。

一方和樹も可愛らしい優子のまだ見ぬ裸体を思い浮かべながら、身体を熱くしていった。

(続く)